

WRV NEWS LETTER

WILDLIFE RESCUE VETERINARIAN ASSOCIATION

特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

No.134

2025.9.30 発行



野生動物救護獣医師協会は、保護された傷病野生鳥獣の救護活動を通じて市民の野生鳥獣保護思想の高揚をはかるとともに、地球環境保護思想の定着化を目指しています。そのために、常に世界の情勢を学び、会員相互の連絡、交流を行い、治療、研究および知識の普及をはかり、社会に貢献していくことを目的としています。

No.134 目次

希少種保全の最前線 ～トキ保護増殖の現場から～	2-5
令和7年度 油等汚染事故対策水鳥救護研修のご案内	6-7
羽山伸一先生への追悼文	8-14
小松泰史、加藤卓也、梶ヶ谷博、長嶺隆、安田剛士、皆川康雄（敬称略）	
羽山伸一先生を悼む	15
寄付のお礼	15
事務局日誌	15-16

希少種保全の最前線 ～トキ保護増殖の現場から～

佐渡トキ保護センター 獣医師・理学博士 阿部 秀明

トキ保護の現在地

2019年環境省のレッドリストが改訂され、トキ (*Nipponia nippon*) が「野生絶滅」から、「絶滅危惧種 IA」に変更された。2008年の第1回放鳥後、佐渡島のトキは野生下で順調に個体数を増やし、成熟個体も5年以上にわたり生存しているというのがランクダウンの根拠となった。1999年に中国から寄贈された1ペアから始まった日本トキの保護増殖事業は、確実に実を結びつつあり、ここに至るまでの先人の努力には頭が下がる思いである。しかし、トキ保護増殖事業は、日本における希少種保全の最前線を走っているが故に、直面する課題に対して先行研究や模範解答を望むべくもなく、自力で解決しなければならない宿命を負っている。言い換えるなら、トキの保全で見えてきた諸問題は、将来的に他の絶滅危惧種でも直面する可能性が大きいのである。今回は、希少種保全における個体数の増加という最初の山を越えることで、新たに見えてきた課題・問題点を挙げ、それに対する佐渡トキ保護センターの取り組みを紹介したい。

遺伝的多様性をどのように評価するのか？

生物の多様性とは、地球上のあらゆる種が構成する生態系と生態プロセスを包括する言葉であり、生態系の多様性、種の多様性および遺伝子の多様性という3階層から成り立っている。特に希少動物種の域外保全においては、この中の遺伝子の多様性が重要で、飼育集団の遺伝的多様性を適切に評価してペアリング等の繁殖計画に反映させていくことが求められる。

現在、地球上に生息する全てのトキは、1981年に中国の陝西省で再発見された7羽の子孫である。さらに、日本国内に生息するトキは、その中国を起源とする集団から選ばれ日本に贈られた計7羽のファウンダー（創始個体）に由来している。日本のトキ集団は、この2度にわたる極端なボトルネックを経験しているために、従来用いられてきた手法では、遺伝的多様性を適切に評価することが極めて困難であった。例えば、生物集団の遺伝的多様性を評価する際、よく使用されるマイクロサテライト等の遺伝マーカーは、日本トキ集団では多型を示す遺伝子座がほとんど存在せず、指標として用いることは不可能であることが分かっている。そのため、我々は2019年から、ゲノム解析の1つであるGRAS-Di[®] (Genotyping by Random Amplicon Sequencing-Direct) という手法を用いて日本トキ集団の遺伝子多型を検出し、遺伝的多様性の指標として用いている。GRAS-Di[®]は、ゲノム上にランダムに結合するプライマーを用いてPCRを行うことにより、生じた膨大な数の増幅断片を次世代シーケンサーで解析し、個体間の多型部位を検出する手法である（図1）。

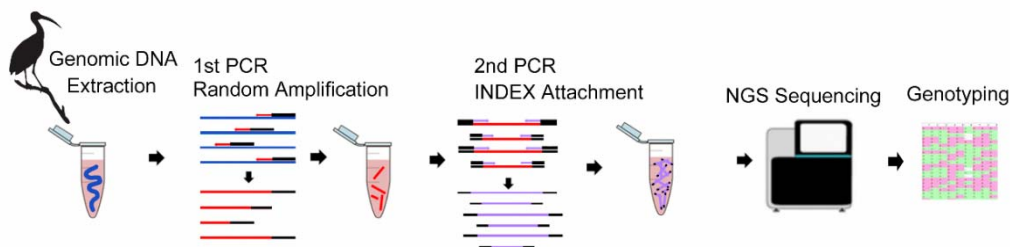


図1 GRAS-Di[®]でゲノム解析をする際のおおまかな流れ

本来は動植物の育種・品種改良分野での利用を想定した手法であったが、コストをかけず大量の多型部位を検出することができるという特性は、希少種における遺伝的多様性の評価という我々の目的と完全に一致していた。一連の解析によって、予想されたとおり、日本トキ集団では遺伝的多様性は低いものの、個体識別や集団遺伝学的解析を行うには十分なゲノム上の多型情報を得ることができた。現在、得られたゲノムデータを用いた日本トキの遺伝的な集団構造の解明、繁殖ペアの選定および雛の個体識別（親子鑑定）などが、既にトキ保全の現場で実用化されている。興味深いことに、日本トキは中国から移入されてから四半世紀ほどしか経っていないにもかかわらず、GRAS-Di[®]解析で得られたゲノム情報に基づく、5つの小集団に分けられることが判明した（図2）。

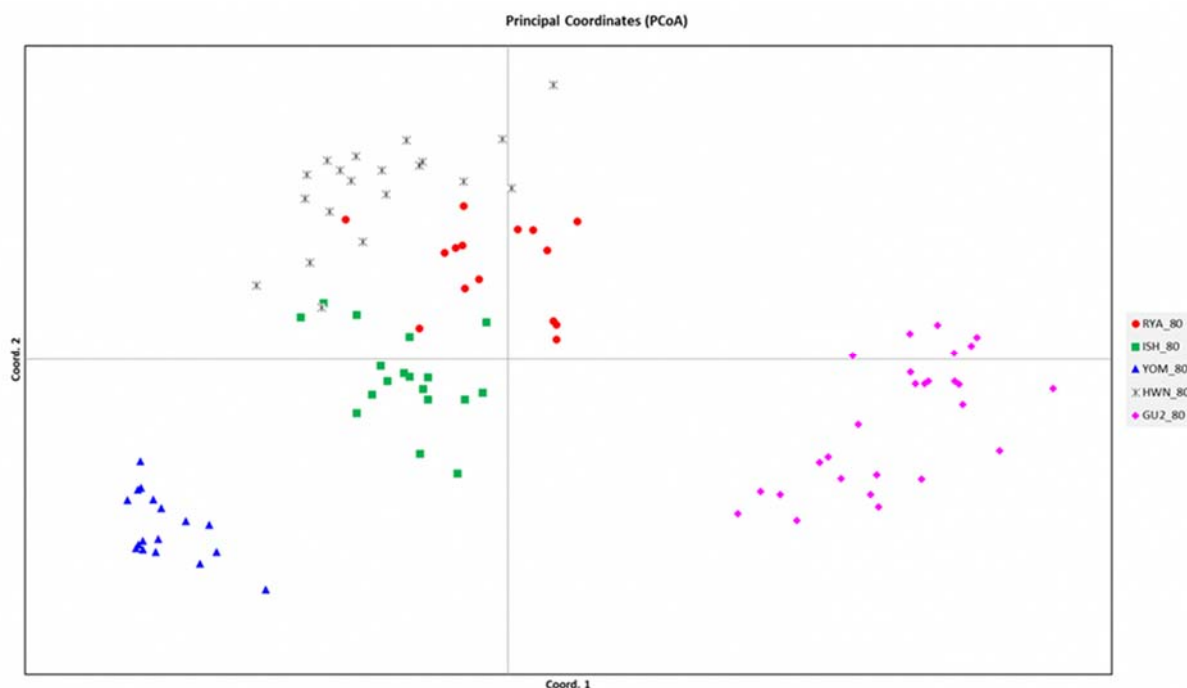


図2 GRAS-Di[®]を用いた多型解析で示唆された飼育下トキ集団の遺伝的構造（阿部、未発表）
（主座標分析 PCoA の結果として示唆された5つの小集団を示す）

トキの平均世代時間を4年とすると、日本国内に移入され5～6世代ほどしか経っていないにもかかわらず、微細な集団構造を検出できたことから、やはりトキのような遺伝的多様性が極端に低い集団における多様性解析には、GRAS-Di[®]を始めとするゲノム解析が有効であると言えるであろう。今後はゲノム情報の収集範囲を野外のトキにまで広げ、集団マネジメントに有用な様々な解析を行う予定である。

飼育下トキの繁殖における問題行動とは？

日本でのトキ保護増殖事業は、飼育下におけるトキの繁殖と、繁殖可能な成鳥の野外への放鳥という両輪で成り立っている。そのため、域外保全の現場では、単に個体数を増やすだけではなく、野生下で競争に打ち勝ち繁殖していくことができる個体を生み出すことが何より重要であり、生息域内の保全を同時に考えなければならない難しさがある。

一般に、飼育施設における希少種の保護増殖計画では、計画開始後は速やかに個体数を増加させることが最重要視されてきた。日本トキの場合も例外ではなく、人工孵化・人工育雛技術が保全計画初期の個体数増加に大きく貢献してきた。実際に、1999年に日本で最初に繁殖したトキである優

優も、人工孵化・人工育雛された個体である（図3）。



図3 トキ保護センターでの自然育雛の様子

（手前の成鳥は人工孵化によって日本で最初に飼育下で誕生したトキの優優）

しかしながら、近年、環境省が野外へ放鳥したトキの生存率を調べたところ、自然育雛で育った個体と比べて人工育雛された個体は生存率が有意に低くなっていることが明らかとなった。つまり、トキの繁殖にヒトが介入する度合いが高まることによって、トキが本来有している競争力や生存能力が削がれてしまっている可能性が示唆されたのである。この結果を受けて、それ以降は、ヒト（飼育員・獣医師）が繁殖に介入することなく、トキに営巣・産卵から育雛・巣立ちまでを任せる繁殖様式、いわゆる「完全自然育雛」を目指すこととなった。

その中で我々がまず直面した問題が、トキの営巣不全と巣外への卵の遺棄（棄卵）であった。トキはたいへん臆病かつ神経質な鳥で、繁殖期に過度のストレスを受けると、このような問題行動をとる場合が多い。そのため、繁殖ケージ内への立ち入り制限や巣台の目隠し等を徹底し、トキの不安やストレスの軽減を図った。その結果、今まで粗末な巣しか作らなかったペアも、立派とは言えないまでも使用に耐えうる巣を作るようになり、棄卵の割合も劇的に低下した。この様な努力をしても、すぐに全ペアが完全自然育雛をできるようになるわけではないが、動物の問題行動を矯正するためには、やはり地道な作業の積み重ねが重要だと感じている。

営巣不全や棄卵の他にも、飼育下のトキには繁殖を阻害する様々な問題行動がある。例えば、飼育下トキの繁殖では、それまで全く問題なく抱卵していた卵を、孵化直前に親自身で割ってしまうことがある。親鳥にストレスを与えたわけでもなく、原因となるような外部の環境要因（騒音など）も全く考えられないため、この行動の原因について、現場の担当者は頭を抱えるしかなかった。しかし、一つの可能性としては、この問題行動は卵の中から殻を割って孵化しようとしている雛を介助するという、本来備わっているべき親鳥の行動が、世代を重ねた人工孵化・人工育雛で急速に失われてしまった結果であるとは考えられないだろうか。人工孵化・育雛に偏重した繁殖は、意図的ではないにしろ、ヒトが考えているよりも速やかに野生の形質を失わせてしまうという仮説は、ロシアで行われたキツネ馴化実験を考慮すると、あながち荒唐無稽とは言えない。

私は、この問題行動への対策としては、「自然回帰」が重要なキーワードであると考えている。つまり、様々な生餌を積極的に給餌する「餌多様化」や、ペアの相手がある程度自由に選択させる「番（つがい）の自由選択」を推進し、文字通り、自然に備わっている繁殖行動を呼び覚まそうとする試みである。このような試みに即効性はないだろうが、長期的には完全自然育雛によって生ま

れる個体の増加に繋がり、さらには、それらの個体を放鳥することで、野外での競争力および生存率の増加に結び付くと期待している。

飼育下トキが直面する高齢化問題

もう一つ別の問題として、日本国内では、飼育下におけるトキ集団の高齢化が進んでいることがある。2025年8月現在、佐渡トキ保護センターで飼育している当年生まれの幼鳥を除く65羽のトキのうち、27羽（41.5%）が満20歳以上の個体である（図4）。

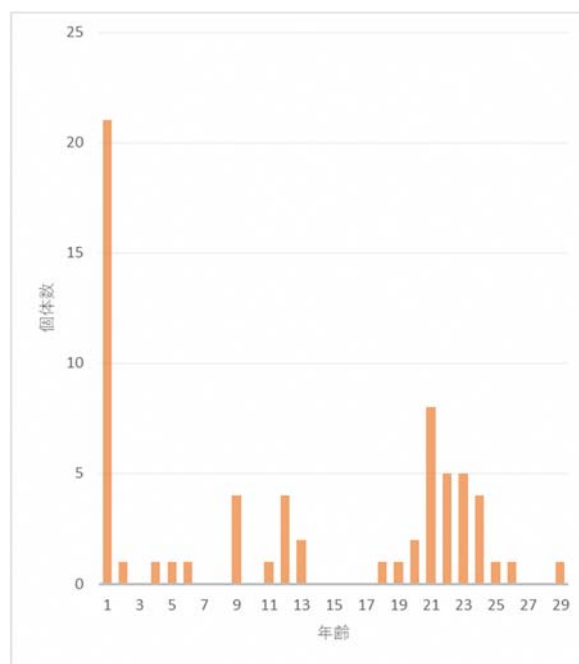


図4 トキ保護センターで飼育されている個体の年齢構成
(2025年8月現在、1歳未満の若鳥を除く。n=65)

トキの年齢を人間の年齢に置き換えるのは難しいが、飼育下での平均寿命が20歳前後であることを考えると、トキの20歳は人間の後期高齢者と同等と考えても差し支えないであろう。これらの高齢個体は、繁殖にも参加できず放鳥に適した年齢も遥かに超えてしまっているため、いわば余生を過ごしているわけだが、保護増殖事業での役割を終えたからと言って、QOL (Quality of Life) を下げてよいわけではない。これらの中には、脚関節が不自然に湾曲する個体や飛翔ができないものも多く、特別なケアが必要であると感じる場面もあるが、なにぶん対象となる個体が多いために途方に暮れているのが実情である。飼育下の希少種保全において、数的な絶滅の危機を脱したそのはるか先に高齢化問題が待っていることを、我々は忘れていたのではないだろうか。もしくは、意図的にトキの高齢化問題を先送りにはしていないだろうか。

現状では、動物福祉の観点から、我々ができることは限られている。例えば、飼料の低脂肪化や厳冬期のシェルター設置、疼痛管理などである。しかも、高齢化対策として使える予算は潤沢ではないため、施設の改善を含め、作業のほとんどを職員自ら行わなければならない。今後、さらに日本で飼育されるトキ集団の高齢化が進んでいくことを考えると、終末期の動物医療を担う設備としてホスピスを設置し、組織的かつ効率的に疼痛管理を中心とした緩和ケアを行えるようにする必要性を痛切に感じている。希少種保全の一環として、繁殖させた個体を最後まで看取することは保全に深く携わった人間の責務であり、この点でも、トキの保護増殖事業が他の希少種保全事業の模範となれるように、今後も粉骨砕身で挑みたい。

令和7年度 油等汚染事故対策水鳥救護研修のご案内

WRV事務局 二階堂 仁美

日本においては、全国各地で海洋における油等汚染事故が多数発生しています。そのため環境省自然環境局では、油等汚染事故などの発生時に、海洋保全と野生生物保護の観点から迅速かつ的確に対応できるよう、「油等汚染事故対策水鳥救護研修」を例年開催しています。

会員の皆さまには、是非、本研修にご参加いただき、そこで学ばれた事を職場における事前準備や実際の事故対応にお役立ていただきたく、改めてよろしくお願い致します。

研修の詳細案内および参加申込み用紙は、環境省水鳥救護研修センターホームページ、または野生動物救護獣医師協会ホームページからダウンロード可能です。

ご質問等ございましたら、環境省水鳥救護研修センターまでお気軽にご連絡ください。



日 程：第1回：現場救護リーダー向け 令和7年10月2日(木)、3日(金)
第2回：鳥獣保護行政担当者向け 令和7年11月11日(火)、12日(水)
第3回：現場救護リーダー向け 令和7年12月24日(水)、25日(木)

会 場：環境省 水鳥救護研修センター研修室 (第1～3回研修)
〒191-0041 東京都日野市南平 2-35-2 TEL 042-599-5050 FAX 042-599-5051
HP <http://www.env.go.jp/nature/choju/effort/oiled-wb/>

対 象：国・地方自治体の鳥獣行政等職員、鳥獣保護センター等職員、獣医師、鳥獣保護員、動物園・水族館職員、水鳥救護に携わる関係者等

参加費：無料（参加のための交通費、宿泊費等は自己負担）

申込先：<https://forms.gle/UejGfFmUhDDgEqvV8>



上記 URL・QR コードより申し込みができない場合は電話・メールでも受け付けますので水鳥救護研修センターに直接ご連絡ください。

主 催：環境省

請 負：特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会（WRV）



会場となる環境省水鳥救護研修センター



講義の様子



リハビリプールの設置実習



アイガモを使った洗浄実習の様子



羽山伸一先生への追悼文



国内外の野生動物に関わるあらゆる問題に取り組んでこられた、まさに第一人者と呼ぶに相応しい日本獣医生命科学大学教授の羽山伸一先生が、去る 7 月 1 日にお亡くなりになりました。そこで羽山伸一先生を偲び、各先生方よりいただいた追悼文を、ここに掲載させていただきます。

羽山伸一先生を偲ぶ

羽山伸一先生(WRV 顧問、日本獣医生命科学大学野生動物学研究室教授)が 2025 年 7 月 1 日(火)にご逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

羽山伸一先生は、1999 年に、野生動物救護獣医師協会が NPO 法人となった時に理事として就任、その後の本会発展に多大なご貢献をなされました。2010 年 10 月 9 日の野生動物救護獣医師協会講習会で羽山伸一先生に「外来動物の問題と対策」をテーマに講演していただき、その中で野生動物問題とは、特定の地域や一部の関係者だけがかわるべき問題ではなく、地球環境問題の重要なテーマの一つであること、社会全体が解決を目指して取り組むべき政策課題であること、そして、個々の野生動物問題をどのように解決していくことが正しいのかということより、野生動物問題というものが単に野生動物自身の問題ではなく、人間社会のありようの問題であるということ学びました。

(公社)東京都獣医師会では、私が自然環境問題担当副会長の時に、羽山先生は野生動物対策委員会委員長として 2008 年から 2014 年まで活動され、小笠原のノネコ対策、海洋プラスチックごみ対策など、様々な環境にかかわる問題解決には、学際的研究がいかに重要であるかということをお教えいただきました。

また 2018 年からは、自然環境保全ワーキンググループの会議で指導的な役割を担っていただきました。

さらに 2023 年からは、現在運営中のワンヘルス (One Health) 条例化アドバイザーボード会議で、人の健康・動物の健康・環境の健全性を一つの健康と捉え、一体的に守っていくという考え方を東京都の条例として具現化していくために、羽山伸一先生の丁寧で実直なご指導をいただいております。そうした中、突然ご逝去の一報が東京都獣医師会にも届きました。

羽山伸一先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

WRV 会長

(公社)東京都獣医師会 監事

小 松 泰 史

羽山伸一先生を偲んで

羽山先生に初めて出会ったのは、私が日本獣医畜産大学（当時）の1年次の講義の時でした。その授業はとても魅力的で、元々、関心の高かった野生動物学教室への配属を心に決めたきっかけとなりました。初めてきちんとお話ししたのは、研究室配属前の訪問時の面会でした。

羽山先生は当時すでに化学物質汚染、絶滅危惧種保全、野生鳥獣との軋轢問題に関する国や自治体の委員会等で多忙をきわめていたこともあり、不在の日も少なくありませんでした。それでも、学会や現場への出張に同行させてもらったり、会議にオブザーバーとして参加する機会をいただいたりしたことは、今の自分にとってかけがえのない経験となっています。いま思えば私の卒論研究も、鎌倉市の市民向けのアライグマのシンポジウムで講演される羽山先生のかばん持ちとして同行し、そこで現地関係者を紹介いただいたことに始まりました。

当研究室のポリシーの一つとして、「来る者を拒まず」と掲げられていたように、所属の室員は勿論のこと、他の研究室や他大学からも羽山先生を慕う学生が多く訪れており、そのような方々の卒業後の活躍を聞いてはとても嬉しそうにされていました。ゼミでは、発表者の学生に対して厳しく的確な指摘だけでなく、学生間の質疑応答で紛糾してしまった時には、発表者側のフォローに回られることもありました。そして、最後には羽山先生の見識の広さに富んだ総括がありました。夏休みの野外研修では、自ら学生に調査方法を指導されていましたが、誰よりも懸命にサルを追うので、羽山先生に専属係を付けたことも印象に残っています。

羽山先生の下に教員として着任してからは、私にとって常に偉大な目標でした。「何ができるかではなく、何をやるべきかを考えなさい」という訓示は、これまでの数々の功績とも結び付いているのだと思います。たとえば、羽山先生は晩年の研究テーマの一つとして、「放射線被ばくした福島ニホンザルの健康影響評価」に取り組みました。震災前より福島市のニホンザル管理に関わっていたものの、羽山先生は放射線被ばくの専門家ではありません。それにもかかわらず学術的・社会的にきわめて重要な成果を上げられたのは、羽山先生の先見性と圧倒的な展開力によって進められたところが大きいのではないのでしょうか。研究開始時には、放射線生物学や放射線被ばくに関する専門書から学術論文に至るまでの膨大な資料を、驚くべき速さで読み込まれていました。なお、ご本人が“卒業論文”と称してとりまとめた本研究成果報告書は、関係者に配布された他、研究室にも大切に保管されています。

羽山先生が闘病を続けながら職務を全うされる中、野生動物学教室は昨年度に創立40周年を迎えました。11月に開催した記念講演会と懇親会には、多くの卒業生が参加され、羽山先生は挨拶に来られた一人ひとりと会話を楽しんでおられました。この式典にオンライン参加された当教室初代教授の和 秀雄 先生が、今年1月25日にご逝去されました。和先生の訃報を聞いた時、ご自身の体調の都合で弔問に行けないことを、羽山先生はとても残念がっておられました。今年の4月末頃から出勤が困難となり、6月末での早期での定年退職が決まりました。また6月下旬に、本学で開催した日本野生動物医学会の30周年記念シンポジウムへのご出席は叶いませんでした。それでもなお、開会挨拶文を送ってくださるなど、私たちに進むべき道を示し続けられました。そして定年退職の翌日、7月1日に永眠されました。

羽山先生、師として、上司として、あなたから多くのことを学びましたが、私に課していただいた命題への答えはまだ十分に見つかりません。まずは先生がこれまで続けられてきたように、野生動物の問題に真摯に向き合い、そこに关わる人と人とのつながりを大切にしながら、自身の為すべき役割を果たしてまいります。

羽山先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

WRV 副会長

日本獣医生命科学大学 准教授

加 藤 卓 也

羽山伸一先生ご逝去に際して

野生動物学研究室教授・羽山伸一先生のご逝去の報に接し、心よりお悔やみ申し上げます。数年前に私は大学を退職していましたので、その後は先生と交流もなかったため、私にとっては突然の訃報で大変驚きました。

羽山先生とは学科も研究室も別々でしたが、同じ大学に在職し、同じような野生動物関連の仕事内容だったため、国や自治体による大規模プロジェクトや大学博物館の立ち上げなど、様々な場面でご一緒させていただき、多くの貴重な助言やお力添えをいただきました。また、羽山先生の研究室と私の所属していた研究室とで、長い間、卒業研究発表会を合同で開催するなど、互いに刺激し合った間柄でもありました。

先生の、飄々としたお姿でどんな困難な状況でも悠然と構えられ、常に大きな仕事に果敢に取り組まれる姿勢からは、私も多くの刺激を受け、また貴重な経験を得ることができました。それらのこと、心より感謝しております。一方で、その裏には、並々ならぬご努力と責任感があったことと拝察いたします。そうした幾多の困難にも泰然自若のようであっても、ことに学外の仕事で行き詰った際には子供のように腹を立てていることもしばしばあり、そんな一面は妙に微笑ましく、親近感を覚えたものでした。

先生にはまだまだお元気でいていただきたかったという思いは尽きませんが、長年のご功績に深く敬意を表し、安らかなご永眠をお祈り申し上げます。

WRV 研究部長

日本獣医生命科学大学名誉教授

梶ヶ谷 博

羽山伸一先生を偲んで

久々の上京は日本獣医生命科学大学で開催される野生動物医学会 30 周年記念シンポジウムに参加して、羽山伸一先生に久々にお会いすることも目的の一つだった。

前日に軽い気持ちで、メッセージを送ったら、体調が悪く、シンポジウムへの参加が出来ないという返事が返ってきた。

胸騒ぎがした。

シンポジウムの前日、羽田空港に降り立ち、国立にある羽山先生の自宅に急いだ。

病床に伏した羽山先生は笑顔で迎えてくれ、奥様の中西先生がノンアルコールビールを差し出してくれ、3 人で乾杯をした。ついでにお二人がお気に入りというノンアルコールワインもごちそうになった。

羽山伸一先生の功績は、福島原発事故によって被爆したニホンザル、国内における鳥インフルエンザの研究グループのとりまとめなど野生動物医学にとどまらず、地球規模での One Health One Welfare の実現にまで及ぶ。これから実現するであろう彼の構想に、世界が追いついていないとさえ思えた。この短いメッセージではとても伝えきれない。

一緒に仕事をさせてもらったヤンバルクイナの絶滅を回避し回復させること、日本初の絶滅危惧種の PVA 開催、彼がいなければ実現できなかっただろう。

病床の羽山先生は終始笑顔だったが、多くを語れる状態ではなかった。

もしかしたら、これが最後になるかもしれない。

どうしても伝えておかなければならないことがあった。

羽山伸一先生の手を握り、「ありがとう」と伝えた。

なぜか、羽山伸一先生の手を握りしめた自分の手は、一人ではない気がした。

沖縄のスタッフ、対馬の仲間、野生動物医学会の仲間たち、全国の後輩たち、全ての羽山伸一先生の教え子たち、そして全国の行政、みんなの手が彼の手を握っている気がした。

羽山伸一先生の温かい手は、力強く握り返してくれた。

「ありがとう」

あなたの「志」は、全国の同志に宿り、間違いなく受け継がれていきます。

NPO どうぶつたちの病院沖縄

理事長 長 嶺 隆

羽山伸一先生を偲んで

去る7月1日、本会の顧問であられた、羽山伸一先生がご逝去されました。羽山伸一先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

帯広畜産大学の学生時代からゼニガタアザラシなどの野生動物問題に取り組んで来られた羽山先生は、現日本獣医生命科学大学の野生動物学教室に助手として赴任されて以来、ご存知のように様々な野生動物問題に取り組み、野生動物医学会の創設や災害動物医療の普及に貢献されました。また、東日本大震災を機に福島県福島市の被爆ニホンザルの健康調査にも取り組み、その功績は枚挙にいとまがなく、まさに「One Health」と言う、生物多様性・健全な生態系を基盤とした、持続可能な地球環境の維持に向けた取り組みの発展に貢献するものであり、とても私などがご紹介できるものではありません。

現日本獣医生命科学大学の野生動物学教室に羽山先生が赴任された時、私はその教室の室員の学生でした。初めてお会いした時の事は覚えていないのですが、当時の和教授（和教授も去る1月25日にお亡くなりになりました。この場を借りて心よりご冥福をお祈り申し上げます。）から、「今度来る羽山君は、しっかりと理論的に考察できる優れた研究者だ」、と高く評価されていたことを覚えています。そして、その通り、私を含め多くの学生達が、羽山先生から科学的な思考法や研究方法を学んだことと思います。

また、私は学生時代に羽山先生に付いて北海道へ行き、ゼニガタアザラシを対象にフィールドワークについても学ばせていただき、貴重な経験を得ることができました。

大活躍をされていた羽山先生とは、大学を卒業後も、私の仕事場がある群馬県の野生動物保護管理計画委員会や鳥獣被害対策で、貴重なご助言を戴いてまいりました。

そして、最後に羽山先生にお会いできたのは、昨年11月3日に開催された大学の野生動物学教室40周年記念式典でした。闘病中にもかかわらず、式典実行委員長を務めた先生のお姿は鮮明に脳裏に焼き付いています。

それから、わずか8か月後に羽山先生の訃報に接し、野生動物医学の先駆者であり第一人者を失った喪失感は、簡単に言葉に表せないものでした。

個人的な体験しか述べられませんが、多くの方々が、羽山先生から得難い貴重な事を学んできた事と存じます。そして、そのことを糧に、我々が、羽山先生の遺志と切り開いてきた道をさらに発展させていく事を、羽山先生にお誓い申し上げたい、と存じます。

元・WRV理事
アミ動物病院 院長
安 田 剛 士

羽山伸一先生を偲んで

羽山伸一先生、今の私があるのは先生の導きと励ましで幾度もあったからです。

私が麻布大学生の時、獣医学生でありながら犬猫には目もくれず野生動物の保護活動がしたく、林学専攻(当時)の他大学生に交ざって、神奈川県丹沢山地にてニホンジカの生態調査に没頭していた。そんな折、シカの行動圏を知るためにテレメトリー調査を始めることになり、シカの捕獲、麻酔、首輪型発信機の装着といった作業に同行することに。その際指揮を執っていたのが羽山先生だった。まさに野生動物保護に直接携わる獣医師を目の当たりにした瞬間だった。

そのテレメトリー調査が始まると、意外にシカの死体を見つける機会が多くあった。私は野生動物なのだからある意味死ぬことは当たり前ととらえていたのだが、先生は死亡原因を特定し、丹沢のシカに今何が起きているのか究明しようというのだ。私たちは死体を見つけるたびに、丹沢山地から先生の研究室(東京都武蔵野市)に運び解剖する日々となったが、その成果は現在「丹沢大山自然再生計画」に活かされている。まさに獣医師目線で野生動物をとらえる大切さを実感した出来事だった。

こうして、私は大学卒業後、羽山先生が指導されていた日獣大・野生動物学教室の研究生になった。1年間ではあったが、先生から野生動物医学について多くを学び充実した時間だった。

その後、丹沢のシカ調査の縁で(株)野生動物保護管理事務所に勤めることになったが、数年が経ち、先生から1本の電話が。「野毛山動物園で獣医師を募集しているがやらないか、“傷病鳥獣の治療”が魅力なんだ」と。私は野毛山動物園に転職し、まもなくして「野生動物救護ハンドブック 文永堂出版」を共同執筆することになった。

2002年、私はWRVに正規職員として採用された。図らずも、その年に発生したプレステージ号油流出事故による水鳥救護支援でスペインに派遣されることになった。その際現地で衝撃を受けたのが、“野生動物リハビリテーター”という有資格者の存在だった。いわゆる獣医師が行う動物医療以外の救護活動を、すべて担っていたのだ。帰国後、私は“野生動物リハビリテーター”を日本にも導入したいと考えていたところ、先生から日本獣医師会の野生動物委員会で議論してみないかと誘われ、「これからの野生動物救護のあり方」を提言した。これを基に神奈川県野生動物リハビリテーター認定制度を創設し、もう20年以上養成を続け450名以上を認定している。まさに先生のおかげだ。

また、2011年の東日本大震災ではペットや家畜の避難・救護活動がクローズアップされ、これを機に先生が中心となって“災害動物医療研究会”を立ち上げるのだが、私も設立者に誘われたのだ。先生曰く「あなたが経験したスペインでの油汚染水鳥の救護活動は、まさしく災害動物医療そのもので、いわば先取りだったわけだ」と。

羽山先生は、私の人生の要所要所で導きと励ましを与えてくださいました。もうそのようなことをしていただけないのかと思うと、とても悲しいです。

先生、これまで本当にありがとうございました。ご冥福をお祈りいたします。

WRV 神奈川支部長
皆 川 康 雄

羽山伸一先生を悼む

去る7月1日に、日本獣医生命科学大学獣医学科の野生動物学研究室を長年に渡り牽引してこられた、羽山伸一教授がお亡くなりになりました。享年64歳。その早すぎご逝去に私自身、今は言葉ありません。

羽山先生には、私がまだ（財）日本鳥類保護連盟に在籍していた頃より30年近く、様々な形でお世話になりました。それは時に、生物多様性の保全等に関する具体的な手法についてのご相談であったり、また公的な活動を進める際の行政機関との対峙や協力の仕方であったり、多様な課題に関してその都度適切なアドバイスをいただき、私に取りましてもそれが常に大きな力となっていました。まだまだこれから先生にはご指導いただきたかったのですが、最早それは叶わぬこととなってしまいました。痛恨の極みとしか言いようありません。

羽山先生には、WRVにおきましても嘗て理事を務めていただき、また亡くなられる瞬間まで顧問としてご尽力賜りました。その多大なるご功績に対し、改めて深く感謝申し上げるとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げる次第です。

なお、先生の成し遂げられてこられた様々な実績の、ほんの一端でも何とか受け継ぎつつ、私自身、今後の活動に邁進していくことをここにお誓いしたいと思います。

（WRV事務局長 箕輪 多津男）



【 事務局より寄付のお礼 】 寄付ご協力者（敬称略）（令和7年6月1日から令和7年8月31日）

○寄付金（一般） 2025.8.18 白倉 豊 10,000 円

事務局日誌 2025.6.16～2025.9.16

=== 6月 ===

19,20：東京環境工科専門学校生・野生動物救護実習（東京環境工科専門学校）〔神奈川支部〕	対応：皆川
21：日本野生動物医学会第89回理事会（日本獣医生命科学大学）	対応：加藤
21：日本野生動物医学会30周年記念シンポジウム（日本獣医生命科学大学）	対応：羽山、加藤、小山、村田、植松、箕輪
21：独逸協会蜚蜥観察会（椿山荘ホテル）	対応：新妻
22：犬猫・野生動物救護センターにてリハビリテーター活動〔神奈川支部〕	対応：皆川
22：第2回鳥見をする会（鎌倉広町緑地）〔神奈川支部〕	対応：皆川
23：令和7年度環境省水鳥救護研修センター・運営協議会	出席：小松、箕輪、二階堂
25：第82回日本獣医師会 通常総会（明治記念館）	対応：小松、中川、高橋
25：令和7年度第2回日本獣医師連盟役員会（明治記念館）	対応：小松
29：稲城市犬の飼い方講習会（稲城市中央文化センターホール）	対応：小松
30：WRV ニュースレターNo.133 発行	対応：小松、箕輪、二階堂

=== 7月 ===

03：会長名義変更手続き（三井住友銀行立川支店）	対応：小松、箕輪
03,04：東京環境工科専門学校生・野生動物救護実習（東京環境工科専門学校）〔神奈川支部〕	対応：皆川

04：傷病野生鳥獣保護治療状況確認（（公社）東京都獣医師会・書面）	対応：箕輪
05：参議院議員研修会（活動センター埼玉）	対応：新妻
06,19,28：犬猫・野生動物救護センターにてリハビリテーター活動〔神奈川支部〕	対応：皆川
07：帝京科学大学・野鳥及び油汚染鳥救護実習（上野原キャンパス）	対応：箕輪
08~09：帝京科学大学・野鳥及び油汚染鳥救護実習（上野原キャンパス）	対応：皆川
10：帝京科学大学・野鳥及び油汚染鳥救護実習（環境省水鳥救護研修センター）	対応：皆川、箕輪、二階堂
12：東京学芸大学附属小金井中学校常任理事会（東京学芸大学附属小金井中学校）	対応：新妻
14：厚木市立玉川小学校4年生の学習指導〔神奈川支部〕	対応：皆川
14：帝京科学大学・野鳥及び油汚染鳥救護実習（上野原キャンパス）	対応：箕輪
15~16：帝京科学大学・野鳥及び油汚染鳥救護実習（上野原キャンパス）	対応：皆川
15：令和7年度第1回東京都外来鳥獣(アライグマ・ハクビシン)防除対策作業部会（Web開催）	対応：加藤
17：帝京科学大学・野鳥及び油汚染鳥救護実習（環境省水鳥救護研修センター）	対応：皆川、箕輪、二階堂
20：神奈川県野生動物リハビリテーター・県内傷病施設見学会（野毛山動物園）〔神奈川支部〕	対応：皆川
21：全国愛鳥教育研究会役員会（新橋）	対応：箕輪
28：東京都獣医師会・令和7年度第2回理事会（東京都獣医師会会議室）	対応：中川、高橋、小松

=== 8月 ===

07：神奈川県野生動物リハビリテーター・県内傷病施設見学会（野毛山動物園）〔神奈川支部〕	対応：皆川
16：名栗川水流研修会（大鳩園上名栗）	対応：新妻
18：日本獣医生命科学大学獣医学科4年次野生動物学実習（日本獣医生命科学大学）	対応：加藤、箕輪
19：犬猫・野生動物救護センターにてリハビリテーター活動〔神奈川支部〕	対応：皆川
21：第4回講演・浦達也氏(日本野鳥の会)「洋上・陸上風力発電が野鳥に与える影響」（さっぽろ自由学校「遊」）	対応：小山
22：猛禽類医学研究所・JAC 環境動物保護財団助成事業報告会(環境省釧路湿原野生生物保護センター・オンライン併用)	対応：小山
25：東京都獣医師会南多摩支部稲城部会（ガスト若葉台店）	対応：小松
26：日本獣医生命科学大学獣医学科4年次野生動物学実習（水鳥救護研修センター）	対応：加藤、皆川、二階堂
26：令和7年度第3回日本獣医師連盟役員会（日本獣医師会小会議室）	対応：小松
28~29：日本獣医生命科学大学獣医学科4年次野生動物学実習（水鳥救護研修センター）	対応：加藤、皆川、箕輪、二階堂
29：令和7年度「ヒナを拾わないで!!キャンペーン」事業報告書提出（環境省）	対応：箕輪
30：神奈川県野生動物リハビリテーター・県内傷病施設見学会（金沢動物園）〔神奈川支部〕	対応：皆川

=== 9月 ===

02：令和7年度第2回東京都外来鳥獣(アライグマ・ハクビシン)防除対策作業部会（Web開催）	対応：加藤
03~05：第168回日本獣医学学会学術集会（シーガイアコンベンションセンター）	対応：加藤
04：厚木市立玉川小学校2年生の学習指導〔神奈川支部〕	対応：皆川
15：鳥海弘・日本獣医師会副会長 旭日小綬章受章祝賀会（レイブランドホテル海老名）	対応：小松

野生動物救護獣医師協会（ホームページ）<http://www.wrvj.org/>（E-mail）kyugo@wrvj.org

NEWS LETTER No. 134 2025.9.30 発行

発行：特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

事務局：〒190-0013 東京都立川市富士見町 1-23-16 富士パークビル 302

TEL: 042-529-1279 FAX: 042-526-2556

発行人：小松 泰史 編集文責：小松 泰史 編集担当：箕輪多津男